

中尊寺金色堂漆芸部材の修復（上）

著者	中里 壽克
雑誌名	保存科学
号	11
ページ	29-46
発行年	1973-03-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1440/00003265/



中尊寺金色堂漆芸部材の修復

(上)

中 里 寿 克

1. は じ め に

解体された中尊寺金色堂内陣漆芸部材の修復は、国宝中尊寺金色堂保存修理委員会（委員長 藤島亥治郎博士，委員 松田権六ほか八氏）によって、当所保存科学部アトリエにおいて行なわれたが、昭和39年3月5日に部材が搬入されてから、昭和42年6月1日の搬出まで、3年と3ヶ月を要した。この間にあって、保存科学部修理技術研究室では、立田三朗室長の指導によって主に当初漆芸技法の調査研究を行ない、併せて修復工程の観察と写真記録等を作成し、修復施工の貴重な資料を得る事が出来た。先年、修理委員会による修理報告書が公刊されたが、修復施工の詳細な報告は省略されており、実際の修理仕様がどの様なものであったかについて知る事は出来ない。このため、当時の資料を整理し、考察を加えて、この逸した部分を補う事とした。

ここであえて実際の修復施工の記録を公にする意図は、復原修理として行なわれたものが、必ずしも当初技法を踏襲しておらず、安易に現代的な手法を用いている事実を明らかにしたい事と、後世に昭和修復の現状を少しでも明確にしておくのが、我々の義務であると考えからであって、この調査報告が今後の金色堂の保存に無意味なものとは思われない。なお金色堂の当初漆芸技法の調査研究は、別の機会に発表したいと考えている。

2. 復原修理とその修理仕様

中尊寺金色堂の修理は、復原修理として行なう事とした。すなわち、残存する沃懸地、螺鈿は出来るだけ保存することに努め、欠失部は残存部の旧手法にならって復原し、出来上りは両者の調整に心掛ける。詳しくいえば欠失部の復原修理を含む金色堂漆芸の保存修理である*。

そして修理仕様については、次の様な順序で実施にうつされた。

- i) 螺鈿貝表面の清掃
- ii) 赤錆落し——沃懸地欠失部に応急処置として塗付されていた赤錆を削り落とす。
- iii) 沃懸地表面の清掃
- iv) 下地固めの準備工作
- v) 螺鈿面の保護（ストリップ塗料による）
- vi) 下地固め（リグロインによる希釈生漆）——沃懸地上の漆はよく拭きとる。
- vii) 地付け、錆付け、化粧錆（40～45%）——沃懸地上についたのはよく拭きとる。
- viii) 錆研ぎ——沃懸地表面には砥石が当たらない様にする。
- ix) 錆固め（生漆のすり漆）
- x) 下塗、中塗（日取り漆）——沃懸地は書割って塗る。
- xi) 粉蒔き、粉固め、塗込み（日取り漆）
- xii) 粉研ぎ（砥石、朴炭）、磨き
- xiii) ストリップ塗料除去
- xiv) 完 成

* 国宝中尊寺金色堂保存修理工事報告書より。

当初の螺鈿は、長年の風化により表面が荒れているために、漆で汚れると非常に見苦しくなり、又毛彫りのあるものは、そこに漆が入ると除去が困難となるので、この表面を保護する必要があり、後からの施工により剥離しないもので、施工に支障のないものとして、緑色に着色されたストリップ塗料（繊維素系接着剤）を当部化学研究室より教示され用いた。

又螺鈿間を埋めた地粉は、当初においては一度に盛つけたものとして、その施工が注目され、現在においては不可能であろうと考えられたが、中尊寺地粉の発見により、2ミリにも達する深い空隙をこの地粉で一度に埋める事が出来、当初施工を再現する事が出来た。復原にあたってはこの所謂中尊寺地粉が全面的に使用された。

以上の様な修理仕様は、すべて修理委員会において決定され実施に移されたものであるが、修復施工を具に観察して来た所では、修理仕様は問題ないにしても、その修復技術と修復方法には、疑問を抱く所がないでもなかった。しかしここでは、この様な疑問に対して批判する立場にはなく、修理事務当局（監督、服部勝吉）の依頼により調査した資料をもとに、実際に行なわれた修復施工を明らかにするだけである事を予めお断りしておく。

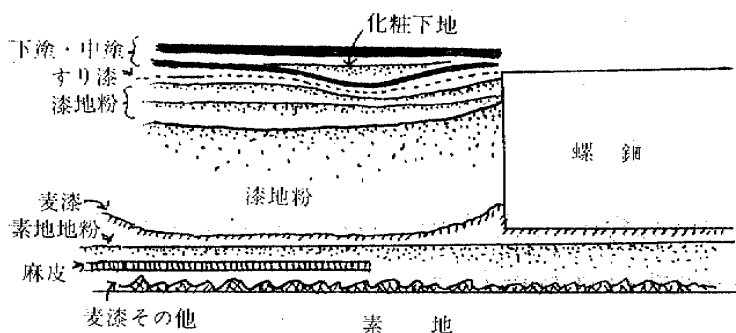
修理は上記の様な仕様にもとづいて行なわれたが、実際には各部材に示される当初仕様に準じて行なわれた所が多いために、一様ではない。ここでは施工工程の現状を写真によって示すと共に、各部材においてどの様な施工が行なわれたかを述べて見たい。

なお、内陣の西面に面する裏側の部材については無目を除き今回修理することなく現状をそのまま残し、今後の資料としている。

3. 斗 の 修 理

斗は大斗が4個、方斗が4個、巻斗が16個、臺股の上に乗る巻斗4個の計28個ある。最初に手がけられた部材であり、又漆地粉がかなり特殊であったために、変則的な修理が行なわれている（図—1）。

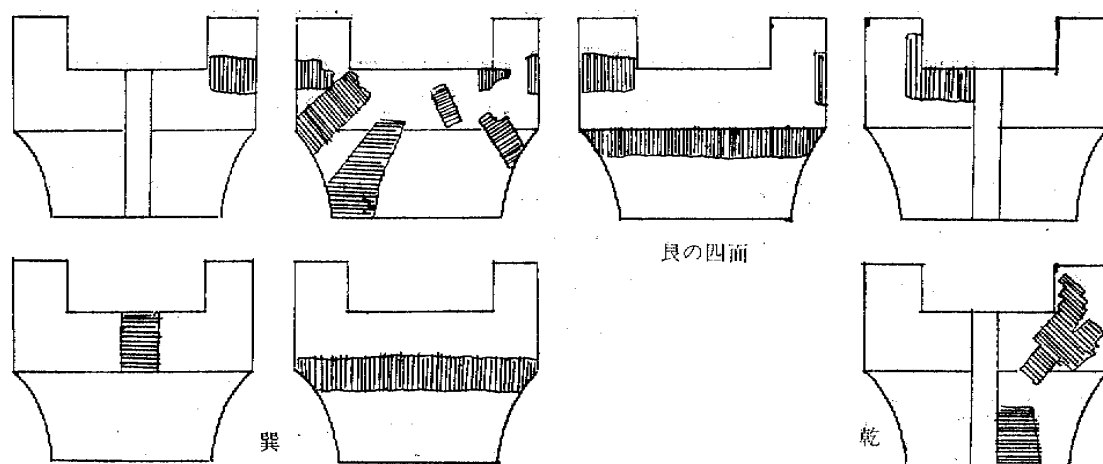
赤錆を除去する段階で、この厚い漆地粉は砂状に老化していたために、泥下地（地粉にふり、又は膠等を入れたもの）ではないかと看做されて、漆で固めることをせずに除去する事にした。事実赤錆除去の際に漆地粉上の沃懸地層が剥離する事が多く、この様な沃懸地層は予めとった拓本の位置に貼っておき、新しい漆地粉をつけた際に貼りもどされたのである。



図—1 大斗における修理工程図

斗はこの様な泥下地状の漆地粉であったために、剥落している所が多く、沃懸地、螺鈿とも、すべて剥落している面もかなりあり、又赤錆除去に際し、沃懸地、螺鈿がすべて剥離して当初の素地の姿にもどったものも少なくない。この様な素地面は麦漆や残存する赤錆等により平滑でないで、漆で一たん固めた

後、素地地粉をつけて平滑となし、螺鈿を貼りやすい様にした。大斗においては、素地地粉の前に、木割れに対し麻の皮を平らにして木割れに直角に貼りつけたが、類のない施工と思われる（図—2, 3）。素地地粉は、巻柱において大規模に施されているのが見出されたが、その他の部材では認められない施工である。



図—2 大斗の木割れに施された麻皮の位置



図—3 大斗良の麻皮貼付け図



図—4 和紙貼付けの螺鈿を置く

素地地粉の上には、当初技法にもとづき麦漆を全面に塗布し、予め図取りされた和紙に残存螺鈿及新補螺鈿を貼付けて文様として完成させたものを、押し当てて接着させた（図—4）。

和紙は水で濡らしてすぐにはがしとり、多少螺鈿位置を修正して乾固させた。先に剝離している沃懸地は旧位置にもどして麦漆で接着し、紐等で強く押さえて固着させた。

すでに漆地粉が欠失している部分には、粗目の中尊寺地粉を盛付け、沃懸地にかかったものは、これを良く拭きとっておく。乾固後、砥石で凸部をはつて二回目の細かい中尊寺地粉（中尊寺地粉を水飛したもの）をつけ、更に漆下地をもって3回目を螺鈿の上にも薄く全面につける。乾固後砥石にて水研ぎし、すり漆による錆固めを行ない、塗りに入る。

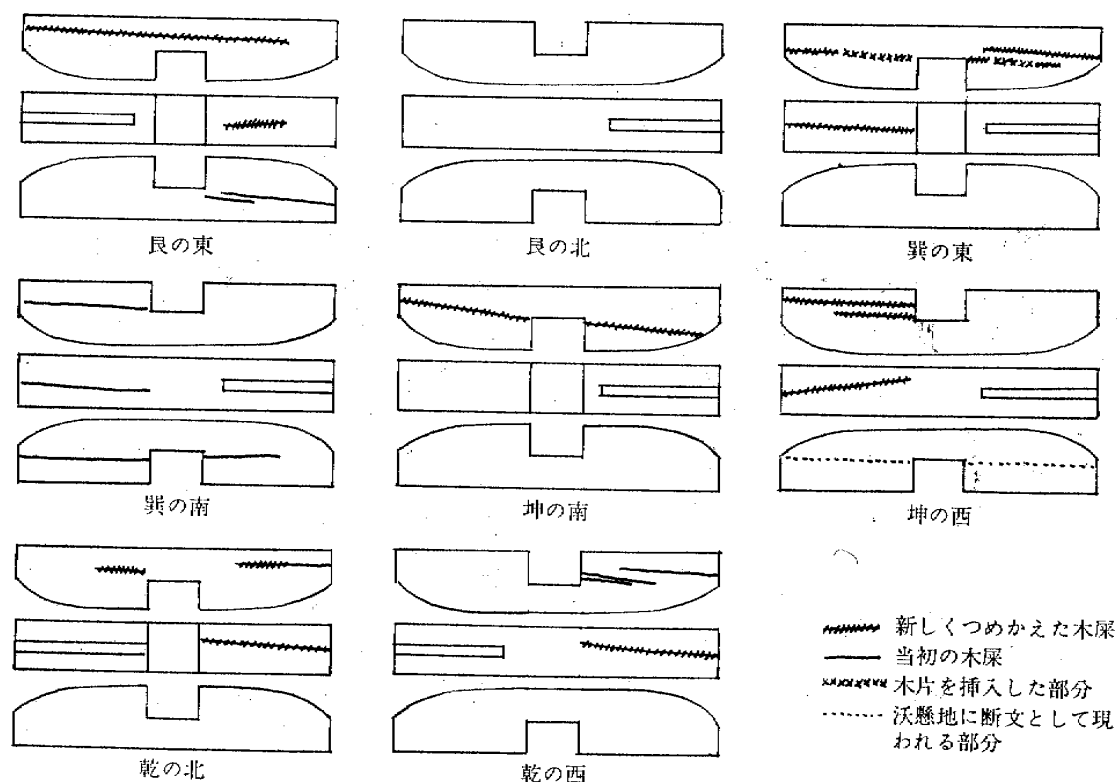
下塗漆は木地呂に呂色を多少混入したものをこことでは用い、下塗り後、凹部には平沢砥粉に細中尊寺地粉を混入した漆下地で繕い下地をつけ、水研ぎ後中塗を塗って、再び水研ぎし、沃懸地施工に入る。これについては順次後述する。

4. 肘木の修理

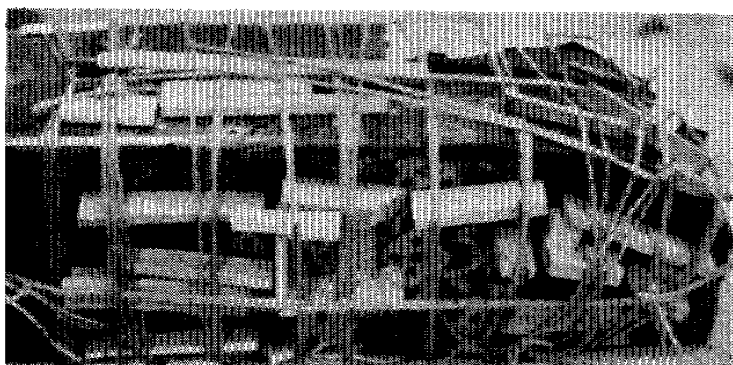
肘木の修理工程は、斗の場合とほぼ同様である。

赤錆除去後の現状では、木屎彫りの老化が目立ち、浮上るものも少なくなかった。これらは取りのぞき、新しい木屎（麦漆に木粉と若干の麻繊維）をつめかえた。巽の東面では細木を埋めた所もある（付図—13）。又螺鈿文にかかる部分は螺鈿をはずさず、そこをさけてつめる様にした（付図—15）。

古い木屎は、麦漆に繊維質のみ混入しているのが見られたが、一部には麻糸なども認められている。ここで新しく用いたものは木粉を主体とし、麻をヤスリで下して繊維化したものを、つなぎとして少し入れている。



図—5 肘木における木屎の施工現状



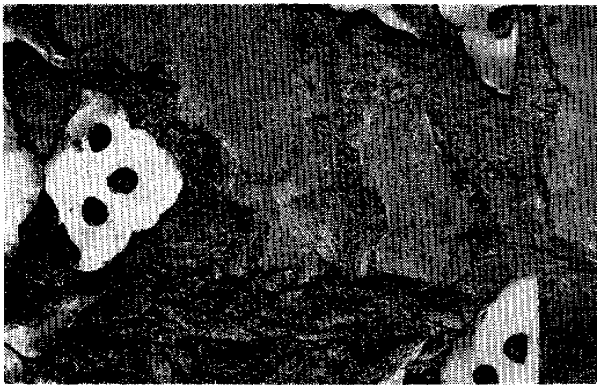
図—6 肘木の締めつけ状態

木屎乾固後、全体にリグロイン希釈の生漆をかけて固め、沃懸地表面は漆分をよく拭きとる。

この後反上った沃懸地を直すためにアクリル板を敷いて紐で強くしばり、そこに木片を挟んで締めつけて乾固させる（図—6）。螺鈿欠失部で地が平滑でない部分は、中尊寺地粉を薄くつけて整地し（付図—16）、麦漆をもって螺鈿を

貼付けて、螺鈿文の完成を見る。

この後、漆地粉欠失部には中尊寺地粉を厚くつけて、良く乾固させ、二回目、三回目の細中尊寺地粉をつけて下地施工をおえる。



図一7 肘木 下地固め後の状態



図一8 肘木 漆地粉研ぎ仕上り状態

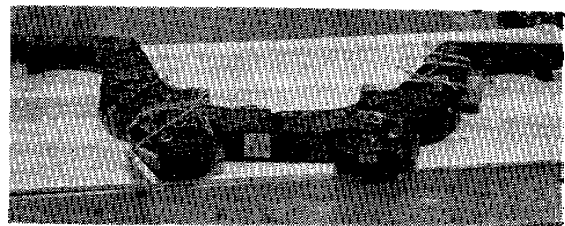
5. 墓股の修理

墓股は用いられた漆地粉が、斗のものに似て泥下地状を示しており、特に東面材と南面材で破損がひどく、漆地粉層の剝落は3分の2にも及んでいる。したがって赤錆除去の際には、沃懸地と一緒に剝離する所が少なくなかった。この剝離片は元位置に和紙の細切りで留めておき、下地固めの前に麦漆で貼りつけた。

この素地は二通りあって、横材の一枚板から削出しているもの（北、西面）、二材を中央で継ぎ表面で鋸を打ってとめるもの（東、南面）があり、後者は継ぎ目が突つきとなり、空隙を生じているので、木屑をつめて裏面から布着せを行なって補強した。南面材では脚部の材が細くなる部分で、木目が縦になる部分にも裏面より布着せした。



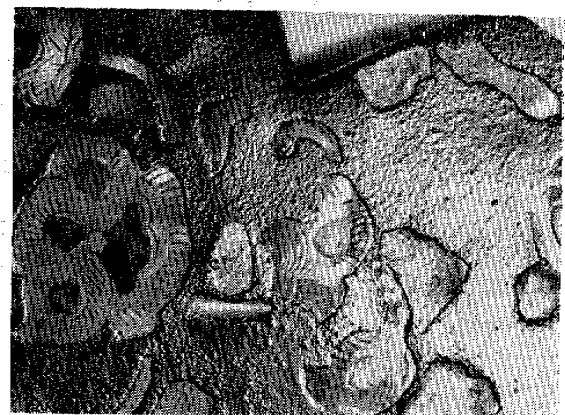
図一9 墓股の締つけ状態



図一10 墓股の締つけ状態



図一11 墓股 粉蒔き状態右同位置



図一12 墓股 沃懸地塗込み状態

下地固めは表面と側面を別々に行なったが、東、南面において沃懸地の剝離したものは予め麦漆で接着して固定したが、4面ともそれほど反上りはなく締めつけは必要としなかった。側面においては曲線が多いので、アクリル板を曲げ、これを所々画鋏でとめ、全体を巾広のゴム紐でしめて固着させた(図-9, 10)。

漆地粉施工は、まず中尊寺地粉を厚くつけた後、細中尊寺地粉を薄くつけて平滑とし、水研ぎを行なった。錆固め後は下塗、中塗日取り漆を塗ったが、繕い下地は行なっていない。

中塗を丁寧に水研ぎした後、同じく日取り漆で地書きして金粉を蒔き、良く乾固後、のべ漆にて粉固めの後、日取り漆で塗込みを行ない、乾固後、砥石、朴炭等にて水研ぎして沃懸地を仕上げた。

6. 頭貫の修理

赤錆除去後の現状は、布着せの浮上りが東面のものはひどく、ほぼ全面が剝離して不安定の状態にあった。又木屎彫りは南面、北面に見られ、これらも部分的に老化による浮上りが見られた。したがって漆地粉層及沃懸地層はかなり剝落しており、残存部分も大きく亀甲文状の断文が入る状態で辛うじて布着せに付着していた(付図-20)。

修理はまず浮上る部分の木屎を除去して、麦漆に木粉と若干の麻繊維を混入したものをつめて表面を平滑にした(図-13)。

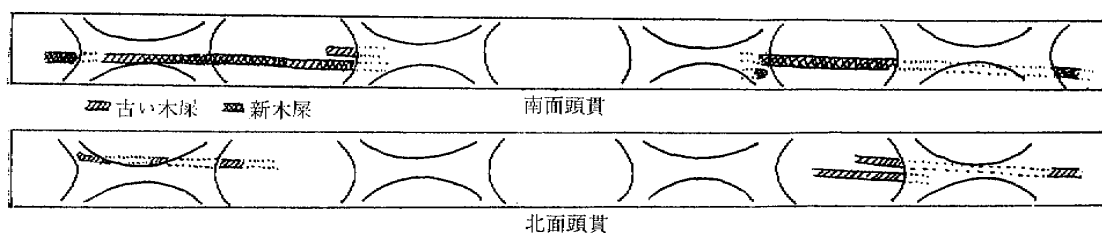


図-13 頭貫の木屎図



図-14 頭貫の木屎 上が古いもの、下の黒い部分が新しいもの

木屎の状態は、南面では浮上りの部分があった為に、つめかえた所が若干ある(図-14)。北面ではほとんど浮上りがないので、そのままにした。東面には木屎彫りは行なわれていない。

布着せが全面に剝離して浮上ってしまった東面の場合は、単に下地固めのみでは押さえきれないので、麦漆をリグロインで希釈して適当の濃度とし、これを針のない注射器に入れ、布目の間に挿入して麦漆を押しこみ、布着せの上からおさえて接着させた。布着せに地粉層がまだ付着する部分も多いので、その下にも充分麦漆がまわる様にした(図-15)。南面には布着せがなく、北面は比較的しっか

りしていたので下地固めのみとした。

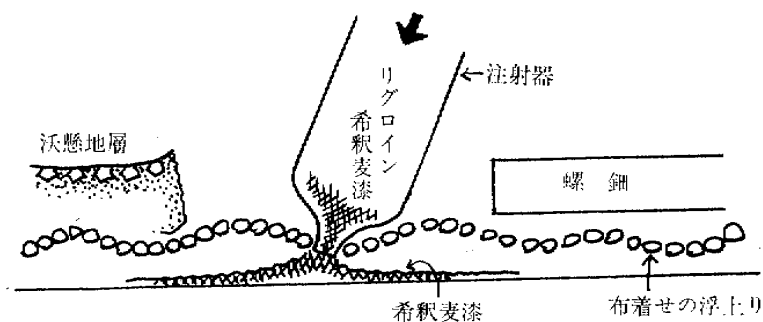


図-15 浮上り布着せの接着

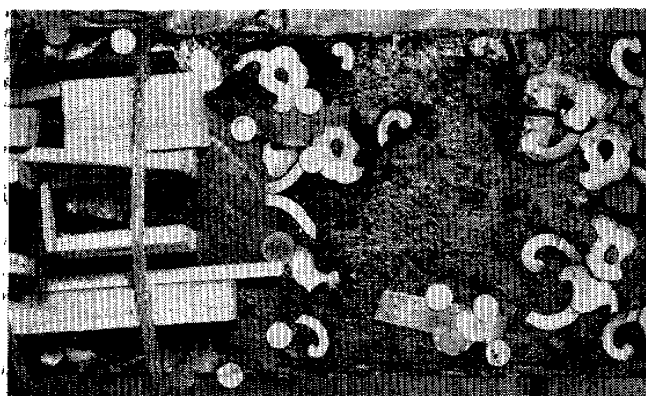


図-16 頭貫の沃懸地おさえアクリル板及画鋏に留意



図-18 頭貫の中塗り状態

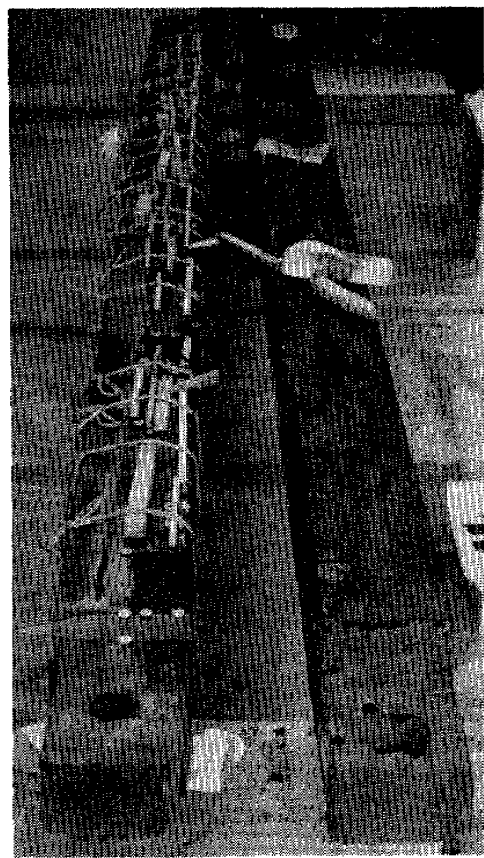


図-17 頭貫下面のおさえ

布着せを押さえると同時に、全体に希釈生漆をかけて下地固めを行なったが、沃懸地層は一般に大きな亀甲文状の断文を示し、反上がりが強いので、布着せの密着を兼ねて反上がりの修正を行なう必要があった。まず局部にアクリル板を敷き、紐でしばり、間に木片を挟んで締つけて乾固させた（図-16）。下面においても同様の施工を行なった（図-17）。螺鈿欠失部には麦漆にて螺鈿を貼りつけて文様を整え、乾固後漆地粉欠失箇所、螺鈿間の空隙箇所等に漆地粉を充填したが、漆は少し強めとし、二回目の細中尊寺地粉も少し強めのものを用いた。丁寧に水研ぎの後、すり漆で錆固めし、下塗り、中塗りを日取り漆で塗った。塗漆は沃懸地にかからない様に丸筆で書き割って塗ったが（図-18）、この施工は他の部材の場合と同様である（付図-20）。下塗り研ぎ後、凹部には繕い漆を塗った。

粉蒔きの地塗りも日取り漆を用い、粉蒔き乾固後の粉固めは延べ漆を用いた。荒研ぎ後日取り漆で塗込みを行ない砥石、朴炭で研上げた。研ぎはひかえ目に粗く仕上げた。

7. 無 目 の 修 理

赤錆除去後の状態は、各面でかなりの相違を示し、まず東では外面と下面で螺鈿の落失が目立ち、沃懸地層は内面で薄く浮上って反上る所が多い。

南では全体的に見て螺鈿の落失が一部にあるが、沃懸地ともそれほど破損は認められない。

西面では外面の鼓形部の沃懸地が4ヶ所ともすべて剥落しているのに対し、螺鈿文部は沃懸地とともに良く残存していて、対称を示している。下面、内面の一部に布着せが見られ、露出する部分は浮上がっている。又下面には木割れが認められ、木屎が施してあった。

北面では3面とも沃懸地、螺鈿の欠失が非常に多く、各面でごく一部に残存を示すのみで、ほとんどは素地を露出していた。

これら4方の無目には、各面で両端と中央に漆地に緑青の伏彩色を施し、ここに金銅透金具を打つが、沃懸地部分とは異なった断文と破損が見られ、いずれもかなり痛んでいた(図-21)。

又赤錆除去によって、今まで知られなかった瓔珞の釘と思われる痕跡が4方の無目の下面に認められ、約9cm 間隔に全長に認められた。

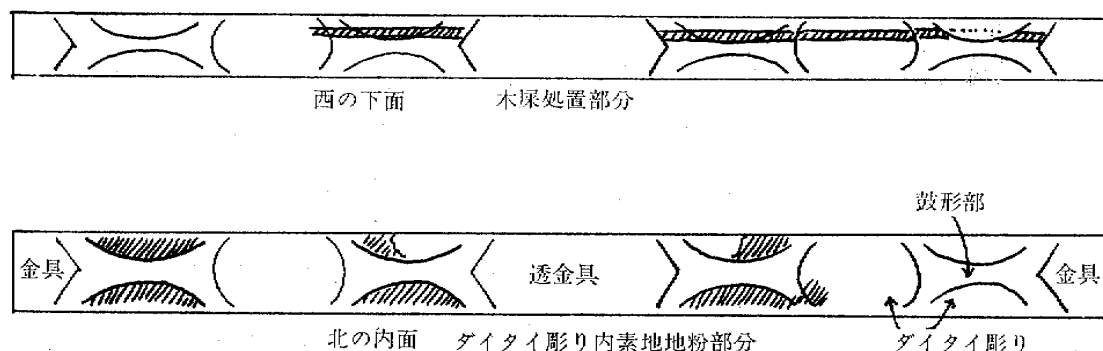


図-19 無目西と北の木屎と素地地粉施工

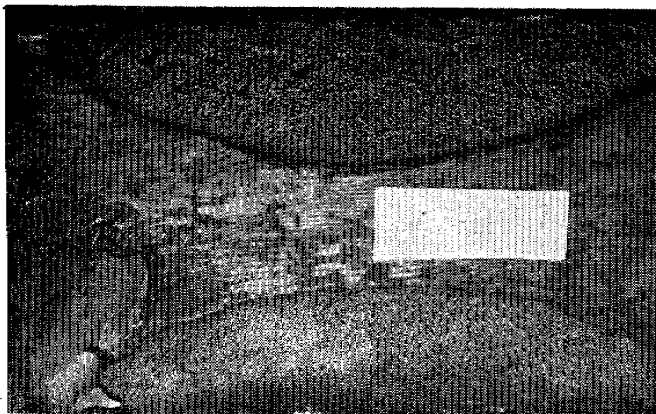


図-20 無目北の内面のダイタイ周別内素地地粉



図-21 無目西の内面透金具下の現状

処置は、西の下面に見られた木屎はほとんど老化して浮上がっていたので、新たに木粉の多い木屎とつめかえた。螺鈿や沃懸地にまたがる所もあるが、この部分は避けて行なった(図-19)。

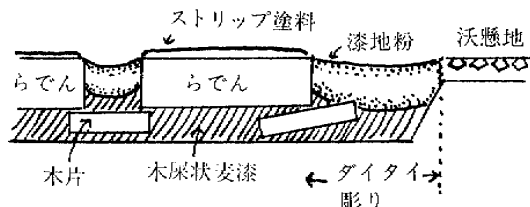
螺鈿表面にストリップ塗料を塗った後、全体に希釈生漆をかけ下地固めを行ない、布着せの

部分には別に希釈麦漆を注入して、細部までよく浸透させ、透金具部分も残存付着する緑青を落としたのち、素地固めを一緒に行なった。沃懸地漆地粉層の部分は、浮上がり、反上がりの修正のため、頭貫等の場合と同じく、アクリル板による締つけを行ない、素地との密着を計った。この場合、三面一緒には出来ないで、他面を養生して、一面ずつ行なった。

北の内面に見るダイタイ彫りは、中心に向かって深く彫られていて水平でないで、一部に素地地粉をつけて深さを均一にした所がある（図—19, 20, 22）。



図—22 ダイタイ彫り内の素地地粉



図—23 無目 螺鈿貼付け図



図—24 当初施工に見る螺鈿下の木片
(矢印) (無目東の内面)

螺鈿の欠失部には麦漆をもって新しい螺鈿を貼付けるが、東の外面のダイタイ彫りは深さが3ミリあって、当初施工においても所謂抹香下地（実際は麻布のほぐしたものを多量に混入したもの）で、その深さを補って螺鈿を持上げているのだが、この施工でも普通の麦漆では定位置に固定出来ないで、木粉と中尊寺地粉をかなり入れて木屑状とし、これを厚く塗布して螺鈿を高位置に持上げて貼付けた（図—25）。それでも螺鈿が沈む恐れのある個所には、下に木片を挿入しておさえたが（図—23）、この方法は当初施工にも、ごくまれに見出す事が出来る（図—24）。

螺鈿面は、当初沃懸地面と平行にならなければいけないので、この点を留意し、定規をあてながら嵌入を行なった。乾固中に沈んだ螺鈿は、はがして貼直したものもかなりある。

麦漆がよく乾固するのをまって、漆地粉をつけるが、まずダイタイ彫り内の沃懸地欠失部に中尊寺地粉を盛りつけ、乾固後2回目の細中尊寺地粉を重ねる。同時に鼓形部の沃懸地欠失部にもつけて、全体の高さを均一にする。

なお、4方の無目の下面には環珞の釘穴があるので、これを漆地粉で覆ってしまわない様に、予め木栓を打っておき、漆地粉の乾固後に抜取った。

乾固後は砥石をもって丁寧に水研ぎする。

下塗り、中塗り、日取り漆を用いて旧沃懸地をさけて書割り塗りとする。下塗り、荒く節をとる程度に、中塗り、沃懸地部分をさけて丁寧に炭研ぎし、平滑とする（付図—20）。

粉蒔き後の作業は前者と同様である。日取り漆にて地塗りを行ない、よく乾燥後、粉固めを行なう（付図—21）。塗込みに先立って表面のざらざらをとる程度に荒研ぎし（図—28）、塗込み後は砥石と朴炭をもって、あまり、奇麗にならぬ様に研上げる。磨きは現在行なわれている一般的な方法を省略し、新沃懸地の部分を軽く胴ずりして、すり漆を2回ほどかけ、つやは出来るだけおさえて、旧沃懸地とのバランスをとった（付図—22）。

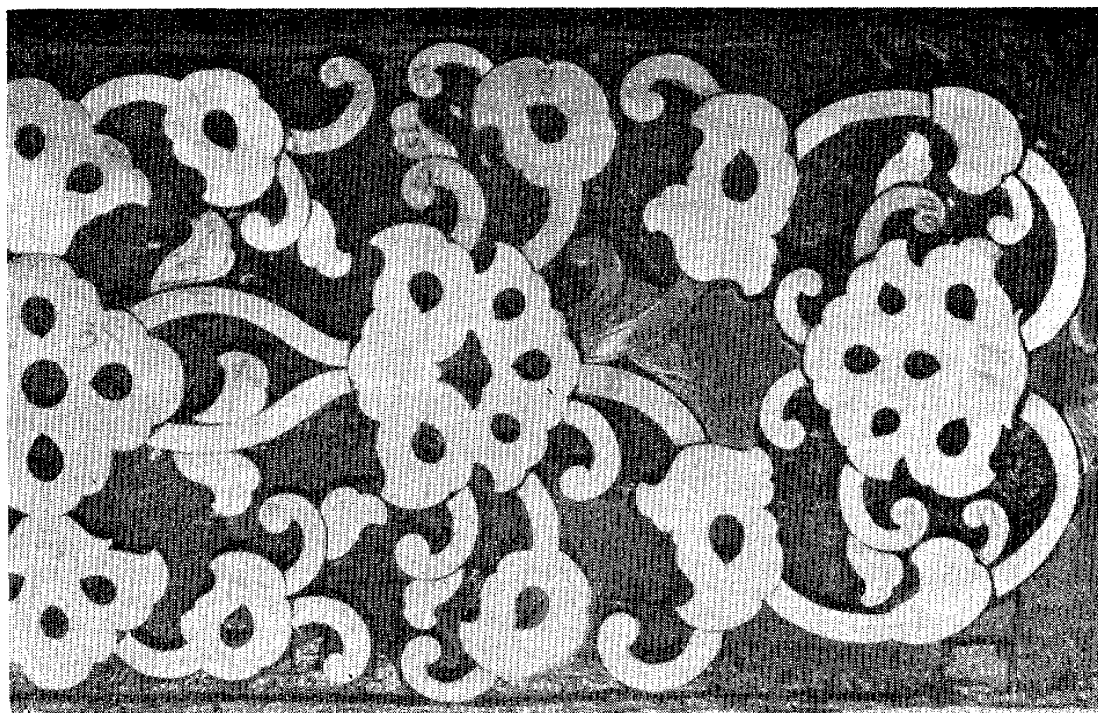


図-25 無目 木屎状麦漆による螺鈿貼付け（東の外函）



図-26 無目 ダイタイ彫り露出部（北の内面）

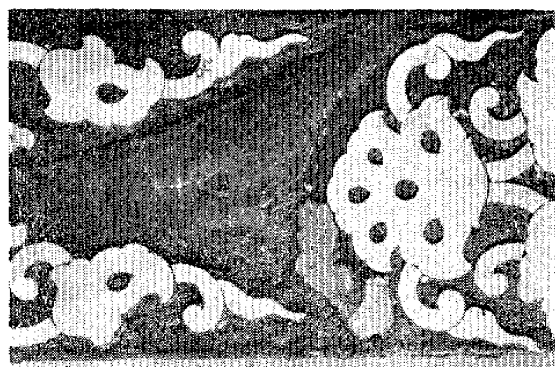


図-27 無目 同左の螺鈿嵌入状態



図-28 無目沃懸地，粉固め後の荒研ぎ状態

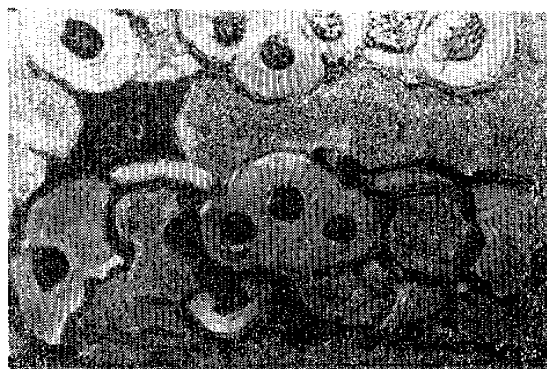


図-29 無目沃懸地，荒研ぎ後の塗込み状態

Résumé

Toshikatsu NAKASATO: Restoration of Lacquered Members of Golden Hall, Chūsonji
(1)

The Golden Hall of the Chūson-ji Temple at Hiraizumi, Iwate Prefecture was built in 1124 by Fujiwara Kiyohira. The members of its Sanctum (**nai-jin**) are all decorated with **ikake-ji** lacquer (dense allover scattering of gold filings on a lacquered surface) and mother-of-pearl inlay, and are typical works of lacquer art in the Heian Period.

The restoration were done at the atelier of our Laboratory between March 5, 1964 and June 1, 1967, spending three years and three months.

Report on the restoration was published some years ago, but details about the actual processes of the work were omitted in that report. I herein supplement them based upon the informations I have at hand.

The principle of our restoration work was restorative conservation, that is, to restore the missing parts to their original appearance in addition to preserving the existing original parts as far as possible.

The members had undergone, probably during the 1900's, temporary retouchments with colcothar lacquer. This pigment was removed completely before we began the work.

The repairs in general were carried out in the following order.

- i) To coat line-engraved mother-of-pearl with strippable varnish (cellulose-type adhesive) in order to protect the surface.
- ii) To reinforce the under coat by covering it with raw lacquer diluted with ligroin, subsequently wiping the remaining surface of **ikake-ji** and mother-of-pearl immediately to remove the lacquer completely; to place acryl sheets where necessary for close adhesion, fasten with strings, insert wood pieces to tighten them, and cure
- iii) To apply supplementary pieces of mother-of-pearl with **mugi-urushi** (paste of a compound of water-kneaded flour and raw lacquer), and cure.
- iv) To fill up the missing parts with rough and fine **urushi-ji-no-ko** (pottery clay blended in lacquer) and, after curing, smoothen the surface by polishing it with whetstone and water.
- v) To apply the under and intermediate coats with desiccated lacquer, and, after curing, polish them with charcoal and water.
- vi) To varnish the decorated parts with lacquer of the same quality as one used for the intermediate coat, apply gold filings immediately, and cure.
- vii) To cover the gold-particled parts with a thin coat of lacquer diluted in camphor solution and, after curing, polish roughly with whetstone.
- viii) To coat these areas with lacquer of the same quality as the intermediate coat; after curing, polish them with whetstone and charcoal; polish them again with

oil mixed with pottery clay powder; and finish off with **suri-urushi** (to wash thinly with lacquer soaked in cotton mass and immediately wipe it off well).

Described above are the processes of general treatment. Aside from these, different treatments were given to certain members according to their different conditions.

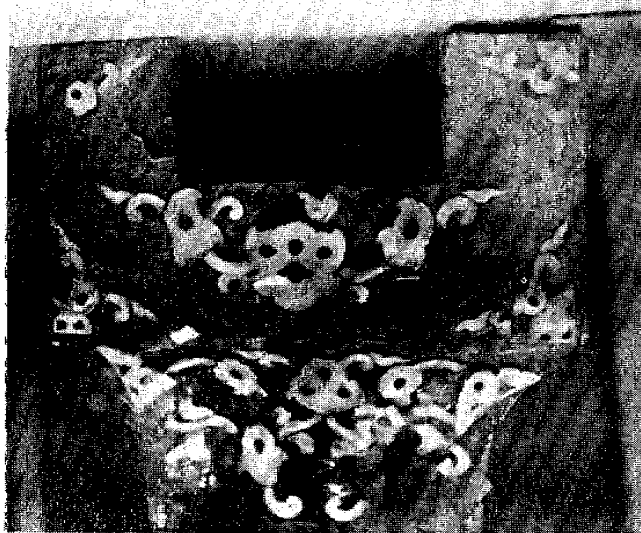
Dai-to (large wood blocks surmounting pillars, on which bracket compounds rest): Sheets of hemp skin were spread over cracked parts at right angles with the latter. The surfaces of these areas were then adjusted by applying **urushi-ji no-ko-fun**. The entire surface was subsequently covered with **mugi-urushi**, over which pieces of mother-of-pearl, previously cut out in desired shapes and pasted to Japanese paper, were applied.

Hijiki (projecting "arms" in the bracket compounds): Cracks had been filled, at the earlier repair work, with **kokuso** (mixture of **mugi-urushi**, pulverized wood and hemp fiber). At many spots the deteriorated filling had "floated", so that it was removed and replaced with new filling.

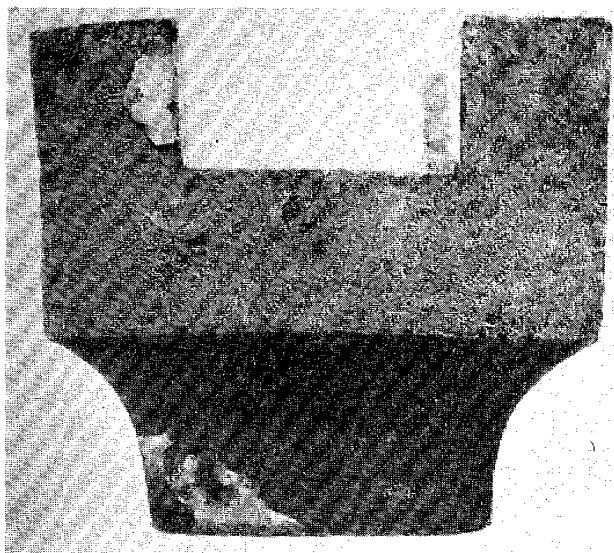
Kaerumata (ornamental paired curving props between two beams of different levels): There were two **kaerumata** consisting of separately prepared and subsequently joined parts. They were reinforced on their back sides with **nuno-kise** (pasting hemp cloth to the surface with **mugi-urushi**).

Kashira-nuki (head beams): **Nuno-kise** had "floated" at some spots, which were fixed with injection of **mugi-urushi** diluted with ligroin. Where **kokuso** filling the cracks had "floated", it was removed and replaced.

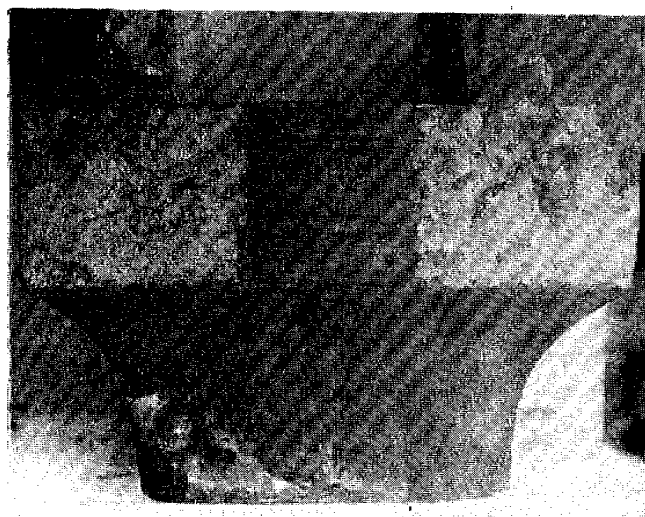
Mume (horizontal blanks at the upper and/or lower end of an opening, like the lintel and threshold): **Daitai-bori** (shallow hollows engraved roughly in the shapes of mother-of-pearl ornaments, in order to make the inlaid surface even with the wood surface) were so deep at some spots that the inlay would sink if fixed with ordinary **mugi-usushi**. The depth was lessened, before applying the mother-of-pearl, by coating the interiors of these spots with a mixture of **mugi-usushi** and good amounts of pulverized wood and **ji-no-ko**. At some spots small pieces of wood were inserted under the inlay to prevent it from sinking.



付図—1 大斗巽 処置前（赤錆除去後）



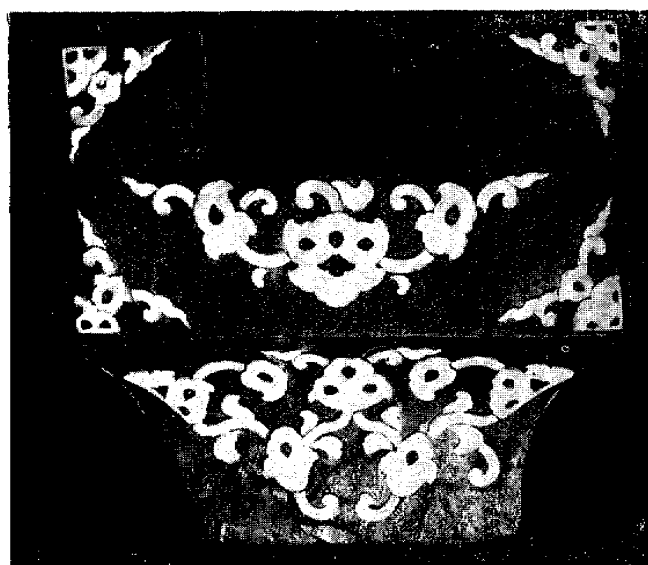
付図—2 素地固め



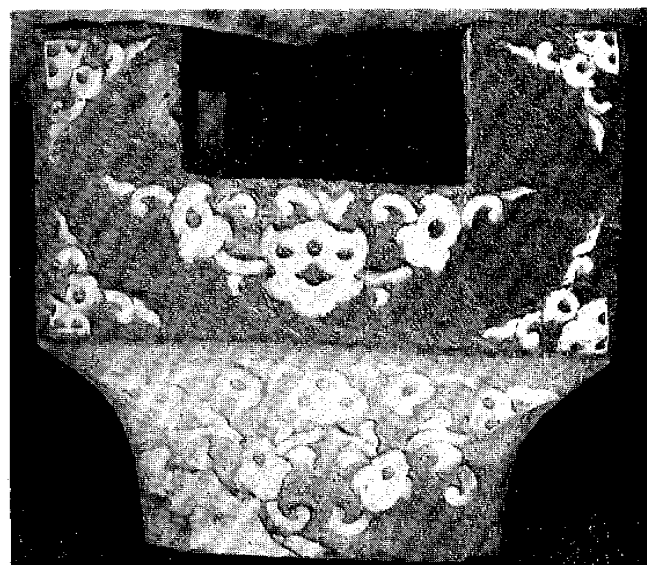
付図—3 木割れに麻皮を貼る



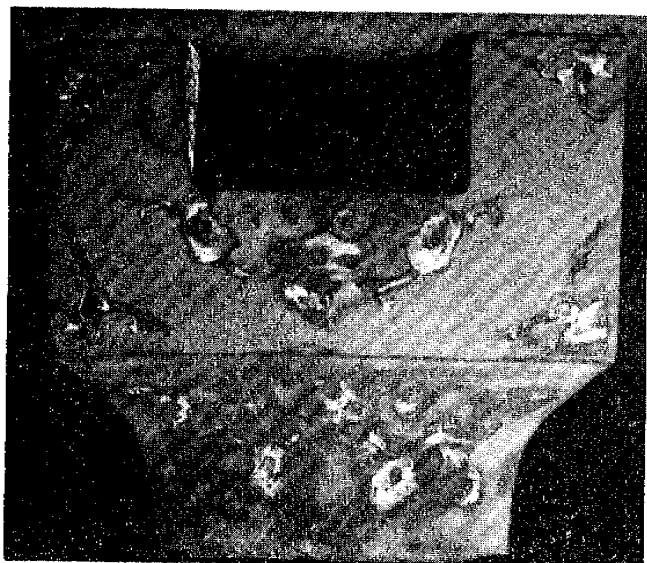
付図—4 素地地粉付け



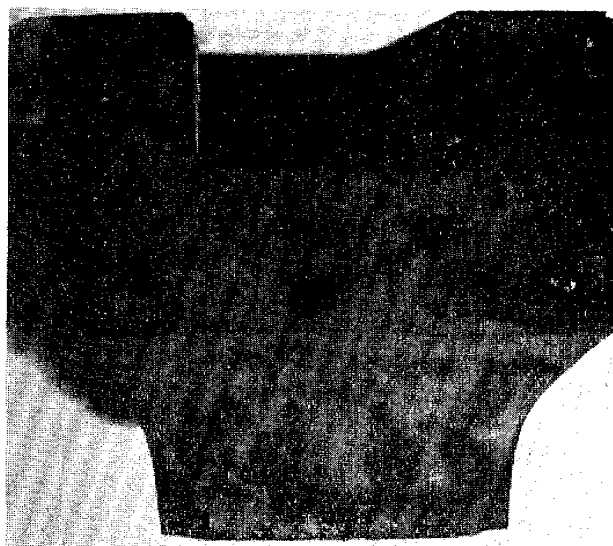
付図—5 螺鈿貼付



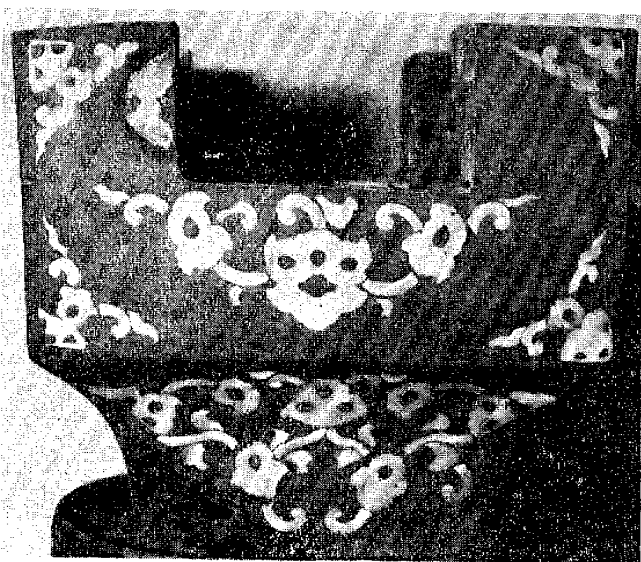
付図—6 1回目 中尊寺地粉付け



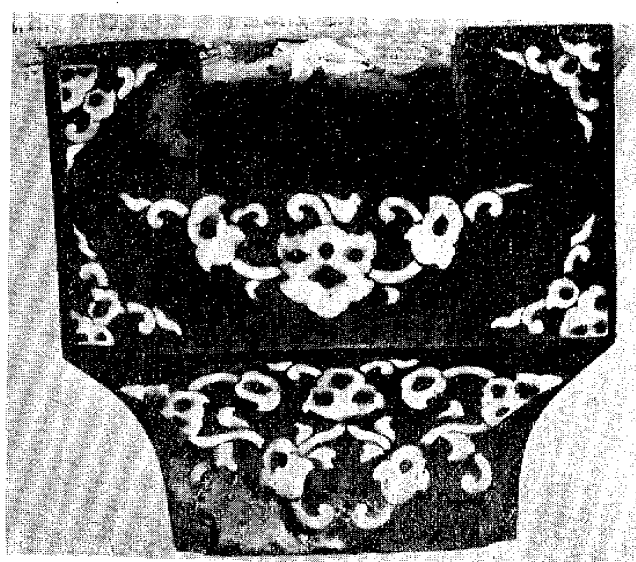
付図—7 2回目 中尊寺粉付け



付図—8 3回目 細中尊寺地粉付け



付図—9 地粉研ぎ後



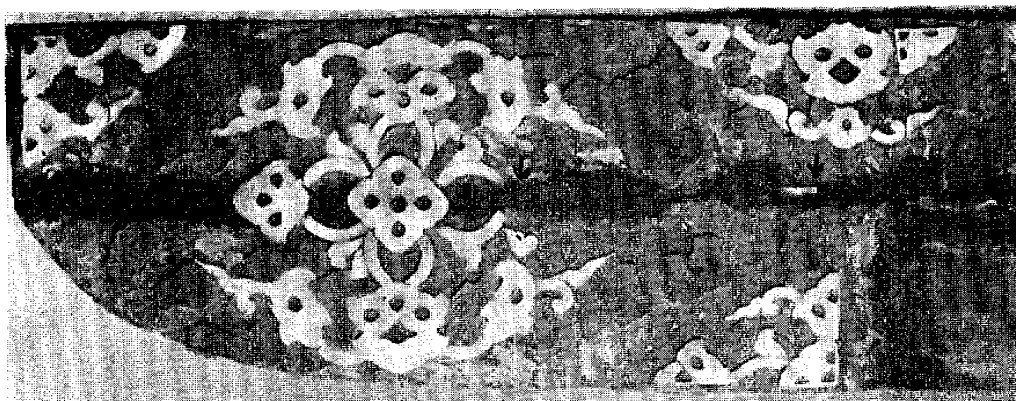
付図—10 錆 固 め



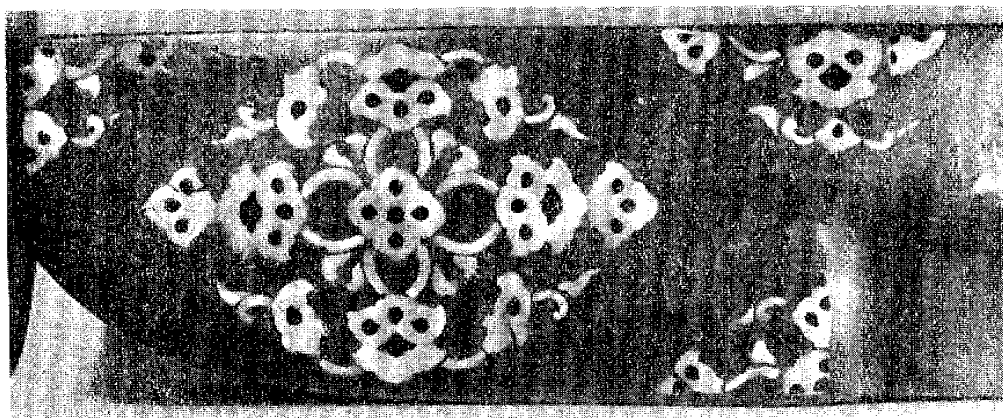
付図—11 下塗後 化粧下地



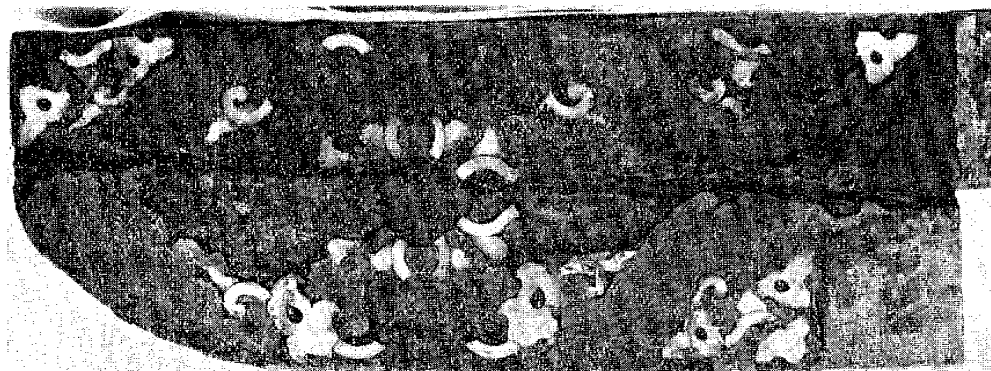
付図—12 完 成



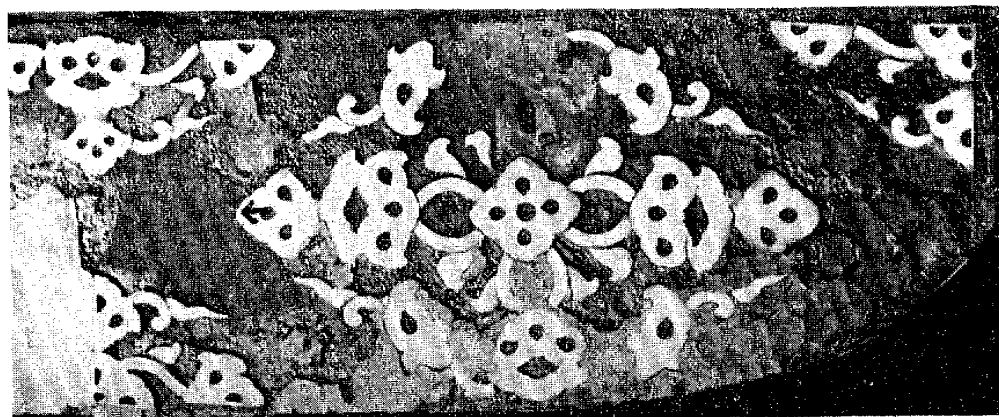
付図一13 肘木 巽の東面 矢印間に木片を埋めた



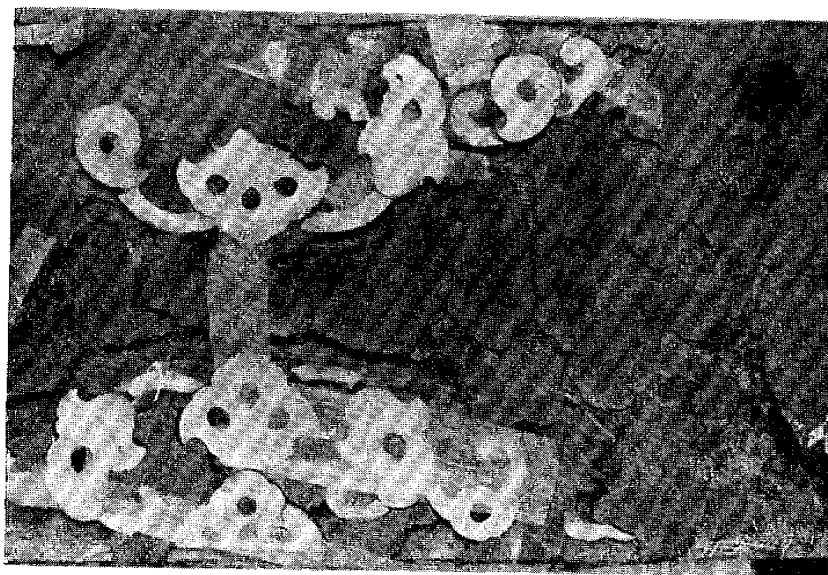
付図一14 肘木 巽の東 完成



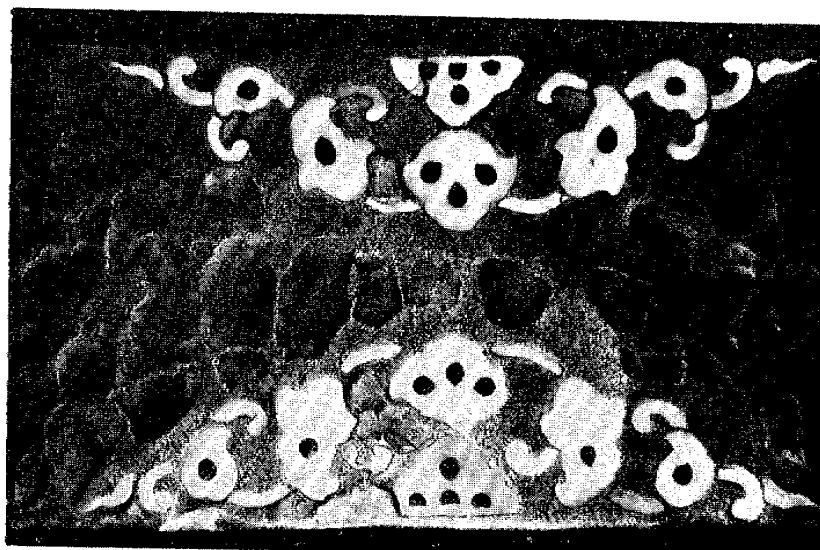
付図一15 肘木 木割れに木屎をつめる



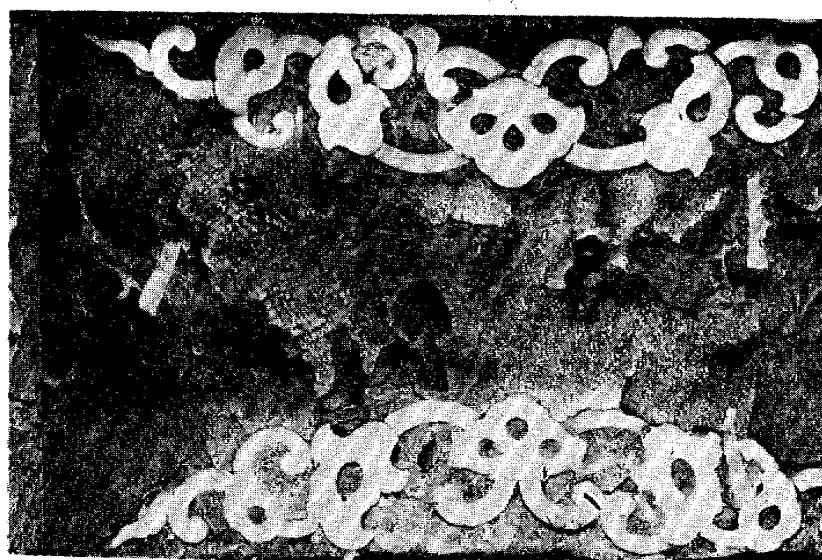
付図一16 肘木 螺鈿間に素地地粉（↓印）



付図一17 頭貫東面の鼓形部状態



付図一18 同上部分完成



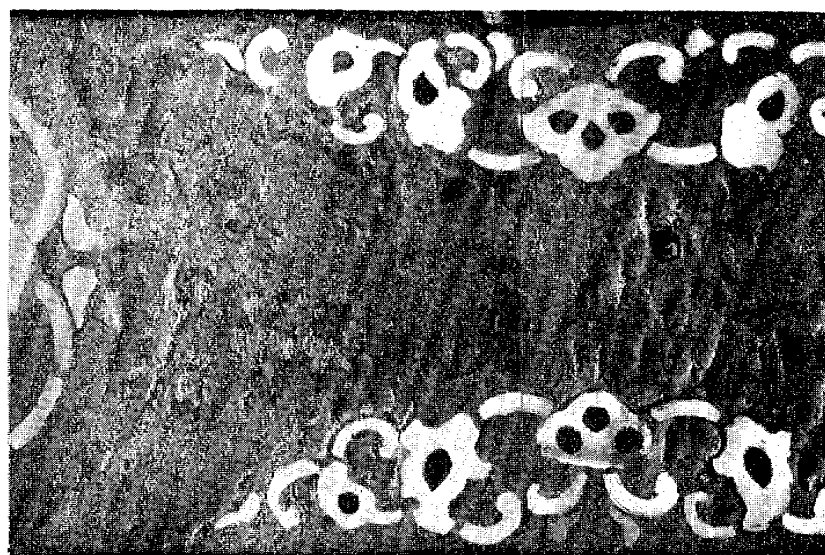
付図一19 無目 処置前（赤錆除去後）



付図—20 無目 中塗り研ぎ後



付図—21 無目 粉固め後



付図—22 無目 完成